

HQR023-P11

会場:コンベンションホール

時間:5月24日 14:00-16:30

長野県北部神城の最終氷期の古植生復元 Last glacial vegetation in Kamishiro, north Nagano, Japan

百原新^{1*}, 白 朝布都¹, 三宅 尚², 苅谷愛彦³, 沖津 進¹
Arata Momohara^{1*}, Bai Chaobudu¹, Nao MIYAKE², Yoshihiko KARIYA³, Susumu Okitsu¹

¹ 千葉大学園芸学部, ² 高知大学理学部, ³ 専修大学文学部

¹Chiba University, ²Kochi University, ³Sensyu University

長野県北部白馬町の神城には最終氷期以降の地層が分布し、飯森東部の標高 750 m の沢沿いには MIS3 から MIS2 の前半に堆積した湖成ないし河川性の地層が露出している。そこでの大型植物化石と花粉分析の調査により、最終氷期中部内陸部山地帯の植生と植物相が明らかになり、現在の亜高山帯植生のなり立ちや、山地帯の植物の最終氷期最寒冷期のレフュージアの様子が明らかになる。

AT テフラを挟んで $35,240 \pm 290$ 年前から $29,630 \pm 100$ 年前までの 5 層準の堆積物から水洗篩分によって大型植物化石群を取り出し、それらを含む地層の花粉分析を行った。大型植物化石群は、カラマツ、トウヒ、トウヒ属バラモミ節、ツガ属、シラビソ、マツ属単維管束亜属と、ダケカンバ、シラカバ、ヤマハンノキといった木本に、草本のスゲ属と、チシマネコノメソウ、ノミノフスマから構成されていた。樹木花粉はマツ属単維管束亜属、モミ属、トウヒ属、コメツガ型、カバノキ属花粉が高率で産出した。大型植物化石群と花粉群で優占する分類群の組成は、中部内陸域から東北地方にかけての最終氷期最寒冷期の化石群の典型的な組成を示す。しかし、その中には、現在の本州日本海側山地から千島列島の多雪・湿潤地域を中心に分布するチシマネコノメソウ種子や、ブナ林の構成種であるウラジロモミ型花粉が含まれていた。このことは、最終氷期最寒冷期の内陸域の針葉樹林内でも、現在の湿潤気候下の山地帯に分布する植物のレフュージアが沢沿いなどの立地に存在していたことを示している。

キーワード: 大型植物化石, 最終氷期, レフュージア, 花粉分析

Keywords: plant macrofossil, last glacial, refugia, pollen analysis